

ある。衆訟渦巻く六朝の後を受けてそれ等の著書を示さんとする意圖が見える。縷々たる三十萬言はまことに支那中世の知性の世界を顯現してゐるものである。正義が要求する意義は當にこゝに認められるべきではあるまいか。支那の經學者は史學を正當に獨立せしめ得なかつたために、學問を系統的にすることが出来ず、知性の發達を阻碍したことは責められねばならない。しかし經學的述作に正しい地位を與へ得ぬならば、現在の我々史學者も亦經史混淆の責を免れ得まい。

わが東方文化研究所經學文學研究室に於て按定した尙書正義定本が如上の意味に於て支那精神文化開明の上に資し得るならば、それは最も本懐とするところである。その日の近からんことを自らも期してゐる。その限りに於て、われらの按定が準備の學であることはいふまでもない。しかしいづれは文化史學の一階程であるにしても、階程そのものはそれ自體としての獨立性をもちその完結性を要求する。茲に一字一句も忽せしむることを許さない所以がある。もし中世文化の資料蒐集の爲になされたのであれば、ただはずともよきところに仇讎の争にも似たる論議が繰返されてゐるのである。けだし中世文化の研究の爲にこの書を読むといふよりは、この書を読むことによつて中世文化の理解に到達せんとする態度を選んでゐるからである。そしてこれこそ本書の刊行に際し讀者の特に留意して戴きたいところである。

按定の成果に對しては、稍々人事を盡し得た喜びを覚えてゐる。按定の態度は既に右に述べたが、按定の資料も、唐鈔本が西陲に

於て見出されてあり、博士家秘傳の書が我國に珍藏されてあり、刊本も亦單疏八行十行と豊富に残つてゐて、しかもそれ等を殆んど全部とり揃へ得たことは、前人の未だ曾つて享受し得なかつた幸福であることを有難く思つてゐる。それら資料の詳細に關しては定本の序を参照されたい。

今般刊行した尙書正義定本の第一冊は虞書の部であり、孔安國尙書序・堯典・舜典・大禹謨・皋陶謨・益稷の諸篇を收めてゐる。また通行本に載せられてゐない唐の長孫無忌及び宋の孔維等の上表も附載した。本文には句讀を施し、後に按勘記を添へた。別に讀尙書注疏記を東方學報に連載して按定工作中の諸問題を述べてゐる。猶、吉川主任研究員よつて國譯がなされ、本誌が玉凡に上る頃には岩波書店より刊行されてゐるであらう。これ等を綜合することによつて尙書正義を尙書正義として整へることはやゝ形をなしたかと思ふ。第二冊以下も引續き刊行の豫定である。

編者の求めによるものとはいへ、按定の末席にある者みづからこの文を草することは、やゝおこがましき感ぜられる。しかしそれを敢てするものは正にわれらの勞作に對し諸先生並びに諸賢の御叱正を乞ひたき微衷に他ならないのである。(東方文化研究所刊、四六倍版、和裝本金七圓、同經學文學研究室刊、洋裝普及版、金壹圓五拾錢) (平岡武夫)

### 雲岡石窟とその時代

支那歴史地理叢書第一

水野清 一著

事變の進展と共に次々と新しいスローガンが古いそれに代つて掲げられてゐるが時日の経過と共に益々その根強さを示して來た現象は東亞文化の再認識と次の新たな創造といふ國民的自覺である。而もアカデミズムがそれを指導する時又新しき時代のアカデミズムに指導された國民的風潮の脚光の二つの焦點が殷墟と雲岡石窟を大きく又はつきりと照らし出した。更に又羽田博士監修下に京都帝大東洋史研究室諸氏によつて企畫された支那歴史地理叢書の刊行も實にさうした國民的風潮とアカデミズム統合の一つの具體化である。その叢書の一冊として本書の出版を見たのである。響堂山、龍門とその石窟研究調査に油のつた水野氏は既に昨年以來雲岡石窟の基本的な調査に着手されて、それは今後數年繼續されるときいてゐる。

さて著者は本書に於いて雲岡の藝術そのものを先ず説かない。著者は北魏時代——洛陽遷都以前——なる背景を述べて今日我々が雲岡の藝術から直接感得する精神を必然たらしめやうと企てる。今日の我々の鑑賞の世界により具體性を帯びしめやうとする。これ著者があくまでも歴史家たることの當然の歸結である。そこに著者の求め得た堅實な態度を看取することができやう。

先ず「土地と民族と歴史」を述べては黃河下流の平原よりは一段とたく蒙古高原よりは一段と低い中間臺地たる所謂長城地帯に移住した北方民族の歴史の運命が支那化の過程を辿れるものであつたことを言ひ、その過程をより大規模により徹底的になしたの

がセンビ族のタクバツ部族によつて興された北魏國家であつたことを云ふ。

次に北魏の部族國家から官僚國家への發展、漢魏晉文化に對する淳朴なる憧憬もて北支那に君臨せる獨裁君主、文化に對してナイヴな進取の態度を持たした北魏人の攝取した佛教といふ基礎的な歴史を述べて今日所謂曇曜の石窟より受ける力、大露佛に見られる氣魄と風貌を歴史の必然性に於いて理解せしめようとする。

北魏人の「石窟造營の精神」の項に於いては第五洞の大佛をめぐり、第六洞の方柱をめぐる構造、維摩と文殊の説話的對問像、法華經の法悅を現はす二佛並座の造像形式をとりあげ以て、北魏人の宗教的態度が常に具體性を求めたものであつたことを述べる。

第十一・十二・十三洞は大體孝文帝初期に作られたと推定されるがその頃北魏佛教は一つの頂點をつくつてゐた。而して孝文帝の理想主義的な漢化政策は黃河の中原、漢魏晉の故都洛陽に遷ることを新たな課題とするにいたり今や第十一・十二洞の外にある佛龕の像などに見られはぢめる次の龍門の特徴こそその充分なる役割を果した雲岡石窟の淋しき最後の日を物語つてゐると結んである。

雲岡石窟とその時代とが即ち背景たる洛陽遷都以前の北魏の歴史と前景たる雲岡の藝術とが綜合された形で極めて平明に而も著者の歴史學的方法に一貫されその嚮導を基礎として記述されてゐる。卷末附録の參考文獻又適切要を得て居り、たとへば本書は二百頁足らずの小冊子とは云へば直擊あふれた好著である。たゞ懺むら

くは參照地圖のないことである。著者は龍門の石窟については稿を改めて叙述することを期してゐる。それに依つて雲岡龍門兩石窟造營の事情により漢魏晉の文化が北方民族の生新な活力を経て新しい隋唐文化にまで創造せられ行く過程が明らかにされるわけだ、其の刊行が期待される。〔四六版、本文一八〇頁、附録一一頁、圖版四葉、富山房發行、定價壹圓貳拾錢〕〔澄田正一〕

岳飛と秦檜 — 主戰論と講和論 —

支那歴史地理叢書第二

外山軍治著

新しきものを創造する——新しき題材を取り上げる、それは宛に華々しい。反之、舊きものを見直すことは、なんとジミな仕事であらう。然し新しき創造も、此のジミな舊きものへの反省批判から出發することこそ、總ての場合の正道であらう。

岳飛と秦檜は、人口に膾炙された所謂舊きものである。それは二つの舊きものでなく、正に岳飛あつての秦檜、秦檜あつての岳飛、此の二つのものは相關的な關係に於いて、觀念上一つの舊きものである。

著者外山氏は此の舊きものを、一は誠忠無雙の大英雄、他は陰險邪惡の極惡人といふ常識を、縦から見、横から眺め、上から見下ろして、その常識の由來をも擬視してゐる。我々の東洋史に關する常識は、驚くべきほど稀薄である。しかもその常識たるや、東洋史學の發達せる現今に於いて、なほ且つ徳川時代の舊説を、

或は古き支那人の舊説を、新しく見直すことも無くそのまゝ踏襲してゐるものが少くはない。岳飛と秦檜の場合はその一例である。それは一體誰の罪であらうか。

著者の言に従へば、岳飛の偉さは、宋代軍閥の首領としての偉さで、他の諸將を統率してゆく程の器量を持ちあはせたととは思はれない、と。又、秦檜の結んだ和議と、その成立を討るために採つた術策は致しかたなし、と常識に一矢を放つた。此の結論を導くために、複雑多岐なる宋金の交渉を、その麗筆を以て書き來り説き去つて、その背景を明かにすると共に、二人物の活躍を如實に描いて、正に著者の獨壇場と言ふべきであらう。

本書は支那歴史地理叢書の一である。この叢書が監修者羽田亨博士の序文にもある通り、支那に關する歴史的知识を、特に堅著しい歴史の學問としてなしに、一般的讀物として讀む間に、自づから領得せしめて、時局下に於ける學問奉公をなさんとするものが、その趣旨であるから、本書の行文の平易さと、裝釘のお粗末なこと故に、或は時好に投じた俗書と、同一視されるの恐れなしとしない。然しその然らざ事は、著者の抱負に見るも明かである。自序に、私は宋金兩國の史料によつて、事實しらべを入念にしたその上で、從來、一般には定説として信ぜられてゐる、岳飛と秦檜とに對する判決に異議を申し立てようとする、と。如何に良心的なものであるか、又同時に如何に會心の作であるか、推察せられよう。専門史家にとつても、十分讀みごたへのある著書である。又書中の地名に一々現在の地名を比定し、要圖を挿み、年